

# 墨書土器・折敷にみる散らし書き

—柳之御所遺跡出土文字資料の調査報告を中心として—

吉田 修

目次

はじめに

第一章 柳之御所遺跡出土文字資料の研究史と調査報告

第一節 「手づくね小皿3775」

第二節 「折敷2081」

第三節 「折敷2774」

第四節 「折敷4050」

第二章 墨書折敷にみる散らし書きの展開

第一節 「折敷2774」が有する筆線跡の実態

第二節 「折敷2081」にみる書式の再検討

おわりに

はじめに

国の史跡に指定される柳之御所遺跡<sup>(注1)</sup>は、平安時代後期を生きた奥州藤原氏の居館跡として知られる。同地における発掘調査はすでに七七回を数え、近年では出土品の多くが一括して重要文化財に指定されたことが記憶に新しい<sup>(注2)</sup>。

さて、本稿で取り上げる柳之御所遺跡出土文字資料（以下、出土文字資料と表記）の特徴は、①完形ないしほぼ完形の土器や折敷に多字数の仮名をとどめていること、②その墨書の構成が散らし書きという書法上の特徴を有している

こと、以上の二点に集約されよう。このような事例は全国的にも珍しく、古代日本書道史の実相を考える上でも出土文字資料が現存する意義は大きい。

しかし、出土文字資料に関する考古学的アプローチが進む一方で、書道学の領域ではこれらの資料がほとんど顧みられてこなかった現実がある<sup>(注3)</sup>。たとえば、散らし書きの研究の中で取り上げられるのは、「寸松庵色紙」をはじめとする平安時代の古筆や、近衛信尹、本阿弥光悦といった安土・桃山時代の能書の散らし書きがほとんどである<sup>(注4)</sup>。また、散らし書きの発生要因を考察する研究が取り上げるのは「源氏物語」や「夜鶴庭訓抄」などの古文獻、あるいは「余白」や「葦手」といった書道学の範疇に収まる諸要素に限定されている感がある<sup>(注5)</sup>。

以上のような点をふまえ、稿者は紙以外の資料に書かれた文字、すなわち出土文字資料を散らし書きの研究対象として扱うことを試みたい。本稿では、以下第一章において出土文字資料に関する先行研究の整理、平成二七年八月一七日に柳之御所資料館において行った調査報告を行う。つづく第二章では、前章において報告した墨書折敷のうち一点に注目すべき筆線跡があることを指摘し、その実態を明らかにすることを試みる。

散らし書きの研究対象として新たに出土文字資料に目を向けることで、本稿において、これまで明らかにされてこなかった地方における散らし書きの展開例に光をあてることができるだろう。

# 第一章 柳之御所遺跡出土文字資料の研究史と調査報告

## 第一節 「手づくね小皿3775」

### ● 先行研究

「手づくね小皿3775」<sup>注6)</sup>【図1】(以下「小皿」)は、平成二年度(一九九〇)四月から一月にかけて行われた柳之御所遺跡第二八次調査によって、土坑二八SK一八より出土した<sup>注7)</sup>。土坑の埋められた時期が一二世紀後半と指摘されており、墨書時期はこれを下回るものではないと考えられる。法量は口径八・二cm、器高二・〇cm<sup>注8)</sup>。

近年では、「小皿」の本文について、岡陽一郎氏らによる検討が行われている<sup>注9)</sup>。同検討において、本文は「うへ くれ/なかすわう/やまふき」と翻刻されており、その大意は、①「装束における色の組み合わせを書いた」、②「ある人物の嗜好の順位を書き付け(中略)上位を紅、中位を「蘇芳」「山吹」とした、③「遊びやもの尽くしの感覚で、戯れに書いた」などと指摘されている。

### ○ 調査報告

「小皿」は、土師器の底部外面に三行、計一二字の仮名を収める。土師器の色味は明るい肌色。目立った割れはなし。「や」字の上部に汚れがある。

書出位置は「うへ」、書止位置は「やまふき」。

墨色は中濃から淡いものまで変化がある。特に「うへ」と「くれ」の墨の濃さの違いが大きい。墨継ぎの有無の判断は困難である。「へ」「い」「き」が特に太い線で書かれ、用筆は総じて朴訥としている。

書式は行頭位置が高↓中↓やや高、といった順に変化する散らし書き。行間は徐々に広がるのが特徴で、「ない」と「すわ」の字間が広く空く。

個々の文字を見てみると、「れ」の収筆、「す」の起筆などに特徴がある。後述する一連の墨書折敷の筆者とは異筆であると判断してよい。

### ◎ 翻刻

うへくれ

な<sup>祭</sup>いすわう

や<sup>万</sup>まふ<sup>丈</sup>き

右の通り、先行研究において「か」と翻刻されていた二行目第二字を「い」と改めた。本文中「くれな<sup>祭</sup>い(紅)」「すわう(蘇芳)」とあり、歴史的仮名遣いと異なる表記をしている部分がある。以下、「折敷2774」にも同様の事例が認められることから、出土文字資料における仮名遣いの混同の例をまとめて稿末に附した【表1】。

## 第二節 「折敷2081」

### ● 先行研究

「折敷2081」(両面墨書。以下、掲載番号の後ろに「表」「裏」を附して両面を区別する<sup>注10)</sup>)は平成二年度に行われた柳之御所遺跡第二八次調査によって、井戸跡二八SE二より出土した<sup>注11)</sup>。法量は、縦三・〇cm、横二・〇cm、厚さ〇・五cm。年輪年代測定の結果は二一四一年とされている<sup>注12)</sup>。

入間田宣夫氏は「折敷2081表」【図2】について「判読不能ながら、折敷を左手にもって、かきつけた様子を示す文字の扇形の配列がみえる」とした上で、折敷を手に取り、そこに和歌を書きつける習慣があったことを示す文献に「宇津保物語」や「とはすがたり」、「吾妻鏡」があると述べている<sup>注13)</sup>。

また、「折敷2081裏」【図3】の本文とその実態について「さすれ八」<sup>注14)</sup>「おほえゆかぬ」<sup>注15)</sup>「殿」などの文字が散見される。和歌ではなく、散文体の書状のような文章であったか。習書であったかもしれない」と考察する<sup>注16)</sup>。

一方、当該折敷の筆跡に書道学的視点からアプローチする論文として、平田

光彦氏による研究が挙げられる(注15)。平田氏は、①折敷の両面間における筆跡の相違、②「折敷2081表」の書式の特異性、以上二点について、それぞれ次のように言及している。①「連綿における文字間の元長さや線質などに似通った雰囲気を感じられるものの、表裏が同筆かを判断できる客観的な同一性は看取されなかった」、②「行が展開することにより傾斜が強くなっており、上段最終行では垂線に対して50度を越える強い左傾に至っている。止むを得ず偶然になったものか、あくまで可能性であり意図を推定するまでは至らないものの、当時の仮名消息に時折見られる形式が参考にされたとも考えられる」などである。

近年では「柳之御所遺跡 出土資料(重要文化財指定品) 目録(注16)」において、まとまった量としては初めて「折敷2081」の釈文が提示されている。とりわけ、「折敷2081表」の本文の一部が「山かな」と意味の通る語句として認識されている点は特筆される。

### 「折敷2081表」

#### ○ 調査報告

「折敷2081表」は、折敷底板に二五行以上、計七〇字以上を収める。折敷の色味は焦げ茶色。全体が四片に断裂した状態で現存する。折敷の左端、右端、下端にそれぞれ二つずつ、計六つの棧の留め跡がある。

書出位置は折敷右上の「あ<sup>か</sup>□」、書止位置は左下の「ものを」と考えられる。墨色は淡いものから中濃まで変化がある。墨継ぎ位置は不明。中央下の文字が細身の線で書かれるほかは、総じて中間的な太さで書き進められる。用筆は部分的にたどしさを伴う。

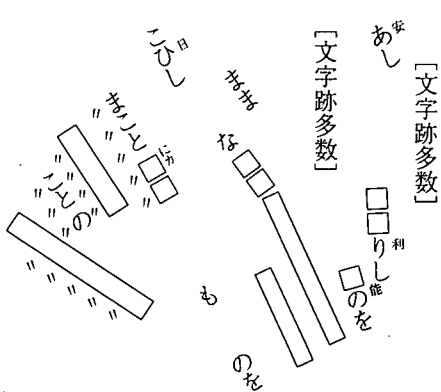
書式は行頭に高低差をつけて書き進める散らし書き。先行研究において指摘のある通り、行が進むに連れてその傾斜が強くなっていく点に当該折敷の墨書の特異性がある。加えて、中央部の行間がことさらに狭い点、書止位置にみる

「も」と「のを」の間が広く空いている点、折敷の左に余白を設けている点などが確認される。

他方、「折敷2081表」は、折敷左端の文字「まこと□□」「□□」「□□」などの「□□」と同一線上に、計四本の筆線跡を有する。これらが文字の上いずれれに書かれているのか、実見を通して判断することはできない。本稿では、当該折敷の裏面にあたる「折敷2081裏」の「さ」字上に抹消符が見られること、後述の「折敷2774」と同井戸から出土した「人々給緋日記(注17)」の墨書に類例がみられることなどから、筆線跡を抹消符と定める。

#### ◎ 翻刻

あ<sup>か</sup>□<sup>か</sup>  
こと□<sup>か</sup>  
あひ<sup>ひ</sup>  
□山<sup>か</sup>かな  
あまくも<sup>も</sup>  
いあな<sup>な</sup>  
つ□<sup>か</sup>



折敷中央部の判読困難な墨書を「文字跡多数」として示した。

「山可かな」「あまくも」「あし」「こ可ひし」「ものを」など、一首の和歌を構成する要素となり得る複数の単語が確認される(注18)。また、「まま」とあるのは踊字を使わずに同一文字を繰り返して書く例として特筆され、後述の「折敷2081裏」に同例がみられる点が興味深い。

なお、「折敷2081表」には「あ」字が計五カ所に書かれるが【図4】、このうち折敷中央上の一字のみ特有の点画を有している点に注意を要する(注19)。

### 「折敷2081裏」

#### ○ 調査報告

「折敷2081裏」は、折敷底板に二〇行以上、計七〇字以上を収める。折敷の色味は焦げ茶色。全体が四片に断裂した状態で現存する。

書出位置は折敷右上の「まことに」と考えられる(注20)。書止位置は不明。「折敷2081表」にみられた棧の留め跡が、本面においても確認される。ただし、折敷右下に書かれる「ま」字は、棧を本面に対して垂直に留めた場合には揮毫困難な位置にある。

墨色は中濃。墨継ぎ後に書かれた文字として、④「よ」字、⑭「お」字が挙げられる。

右上部の四行が細身の線で書かれるのが特徴。前述の「お」字は滲みを伴い、後述する「秋」は渴筆。用筆は総じておろからである。

書式は仮名消息のそれを彷彿させる。後述の翻刻では各行の冒頭に①～⑮の数字を附し、稿者の考える揮毫の順序を試みとして示した。折敷左上には、「まま」「秋秋」など、同一文字が踊字を用いることなく書かれている。

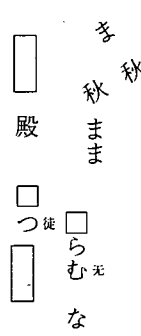
個々の文字を見てみると、「あ」「な」字、「こと」などに特徴がある。すでに確認した「折敷2081表」の同字と比較すれば【図5】、「あ」字は、掬いあげるように書かれる第一画、同画の右隅を通って引かれる第二画、左部

を締めるように旋回する第三画などに、共通の特徴が認められる。「な」字は「あ」字と同様、第一画の右隅を通るように引かれる第二画、第一画の延長線上に打たれる第三画、最終画の結び部分の小ささなどが近似。「こと」は、「こ」字の第一画にみられる筆で折敷を突くような用筆、「と」字の最終画から「の」字を書き上げるに至るまでの運筆のリズムが類似する。

両面の墨書のすべてが一人の手によって書かれたとは限らないが、右に確認した墨書については、いずれも同一の書き手によるものと考えてよいだろう。

#### ◎ 翻刻

- ⑩ この、
- ⑪ は、
- ⑫ あまの
- ⑬ ことの
- ⑭ おほち
- ⑮ ほかは
- ① まことに
- ② ゆかぬ
- ③ な
- ④ よ
- ⑤ さ利カし
- ⑥ かやなる
- ⑦
- ⑧ まさすれは
- ⑨ かみ、らのひえのやま



このように、本文には「まことに」「ゆかぬ」「かみ、らのひえのやま」「こと」は、あまのことのおほち「ほかは」などの語句が確認できる。加えて、これらの語句は「誠に」「行かぬ」「神々らの比叡の山」「この野は母尼の古都の大路」と漢字仮名交じり文に置き換えて考えることが可能。本稿においてこ

これらの大意の検討はかなわないうが、自然の信仰を意味するような語句が見受けられる点が注目される。

また、⑧「さ」字上には、右上から左下にかけて引かれる筆線跡がある。用筆は⑥「か」から「や」へ続く連続線に似るが、筆線跡を文字の一部と認識するのは困難であり、本稿ではこれを抹消符とした。このように考えると「まさすれば」を「座すれば」の意と捉えることも可能となる。

### 第三節 「折敷2774」

#### ● 先行研究

「折敷2774」(両面墨書)は、「折敷2081」と同様、柳之御所遺跡第二八次調査によつて、井戸跡二八SE一六より出土した<sup>(注21)</sup>。法量は、縦二九・〇cm、横一八・五cm、厚さ〇・六cm。年輪年代測定の結果は一一五八年とされている<sup>(注22)</sup>。

はじめに、入間田宣夫氏は「折敷2774裏」【図6】について「宴席における即興の記載か。和歌のようなものであったか。いかにもそれらしい文字の配列が見られる。ただし、文字のいちいちの読みについては成案をえない」と述べる。また、同氏は「折敷2774表」【図7】を「判読不能」とするが、これを「二人以上の筆跡が重複している」と考察する<sup>(注23)</sup>。

次に、松本建速氏は折敷の上下に見られる穴を棧の留め跡と推定する<sup>(注24)</sup>。そのうえで、松本氏は「折敷2774」両面の墨書が棧を留めた状態では揮毫できない場所に位置する点に注目し、「文字は折敷の棧がはずれてしまつてから書かれたことがわかる」と考察する。この時点で「折敷2774裏」の墨書が「右から一二行目までの文字列と、右から五六行目の文字列が同じ文字列である」と指摘されている点も特筆されよう。

また、「折敷2774裏」の釈文について初めて検討を試みたのが、岡陽一郎氏による報告である<sup>(注25)</sup>。以後、釈文は同氏らによる再検討を経て<sup>(注26)</sup>、

近年「しはしよら／すは／とのわ／おもくとわ／しはしてよら／すは」と翻刻されている<sup>(注27)</sup>。

他方、平田光彦氏は「折敷2774裏」について「造型意識がしっかりしており、言葉の伝達性や美観を保持する意図、つまり他者に読まれる(観られる)ことを想定して書写された可能性が考えられる」と指摘。折敷両面に見られる「お」「こころ」「ら」字など共通文字の比較を通して、両面の書き手は同一人物であると考察する<sup>(注28)</sup>。

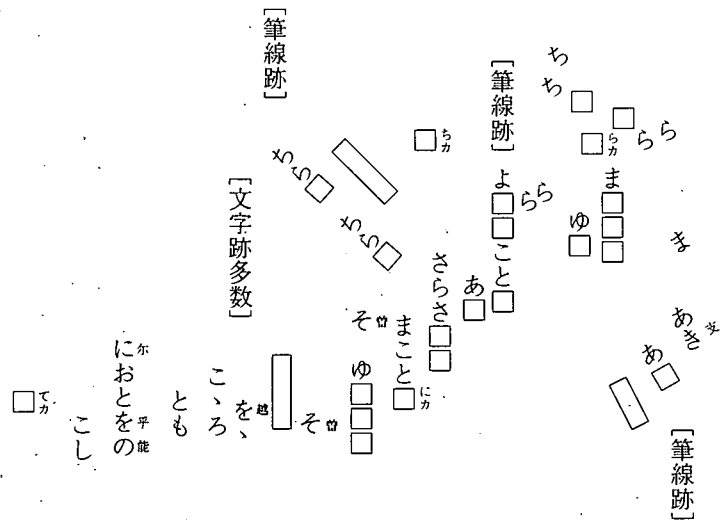
#### 「折敷2774表」

#### ○ 調査報告

「折敷2774表」は、折敷底板に一五行以上、計五〇字以上を収める。折敷の色味は明るい肌色。部分的に焦げ茶色の斑模様がある。左上に亀裂が入るが、折敷が二片に断裂するまでには至っていない。

書出位置は不明。書止位置も定かではない。墨色は中濃から淡いものまで変化がある。また、墨継ぎ後に書かれた文字として、右上「ら」字、中央下「ま」字が挙げられる。用筆は流麗。総じて細い線を用いて仮名が書かれるが、文字とは関係なく書かれた複数の筆線跡には際立った太さを確認することができる。

定まった書式は存在しないかのように見えるが、折敷の左上と右下には余白があり、文字は折敷を縦にして垂直の方向に書くのを基本としている。一方、左上には「ちら□」字を、右上には「ち」「ら」字を、中央右には「あき」字を繰り返す、折敷を右に四五度回転させた角度で墨書している<sup>(注29)</sup>。



判読できる文字は決して多くない。しかし、本文中「まこと」「こゝろ」などの語句が確認され、これらは「誠」「心」と漢字に改めて考えることが可能である。加えて、折敷左下の語句「おとをの／こし／□（てカ）」は、「音を残して」と漢字仮名交じり文に置き換えることができる。当該語句を含む和歌が古文献上に認められる点、一文を三行に渡って散らし書きにしている点が特筆される。

「折敷 2774 裏」

○ 調査報告

「折敷 2774 裏」は、折敷底板に六行、計二三字を収める。折敷の色味は明るい肌色。左下から右上に向かって薄い鉛色のシミが放射状に広がる。右下にこれより濃い色の複数のシミあり。「折敷 2774 表」において見られた表面の亀裂は「折敷 2774 裏」の面まで届いていない。

書出位置は折敷中央部の「志はをら」。これは「志」字が大きく、特に濃い墨色で書かれていることから判断される。書止位置は左下の「す□て」。折敷の下端と右端に「○」や「／」などの墨痕がある。

墨色に大きな変化は見られず、「折敷 2774 表」の文字に比べて濃い墨で書かれる。墨継ぎ後に書かれた文字として第一行「を」字（筆の状態を整えるため、第三画で墨継ぎしたものと考えられる）、第二行「す」字、第三行「と」字が挙げられる。用筆は流麗。

書式は右から書きはじめ、改行を繰り返しながら各行の行頭に高低差をつけて書き進める散らし書き。行頭位置が高↓中↓低、高↓中↓低と規則的に変動する点、行を追うにつれて行間が徐々に狭くなっていく点が特徴である。

個々の文字を見てみると、第四行「こゝろ」第五行「を」字が字形、用筆ともに「折敷 2774 表」の同字と近似していることがわかる【図 8】。これらは同一の書き手による墨書と判断してよい。

なお、第一行、五行に書かれる「志」字は、本来、左から右に向かって第三画横画を書くべきところであるが、これを逆に向けて書いている。他の出土文字資料中に同様の事例は確認できず、今後の検討を要する（注 31）。

「は」字は第一画が内側に向かって書かれている点に注意。字形を観察する限りでは「い」字と捉えてもよいところだが、本文の意味の通りを考慮し、本稿では「は」字とした。藤原定家（一一六二～一二四一）の墨書に類例が見られる（注 32）。

また、「を」字は、①第一画と第二画が連続している点、②第二画から第三画への連続性が希薄である点に注意。①については、伝源俊頼筆「元永本古今集」(一一二〇年成立)の同字にしばしば類例が見られる(注33)。ただし、②のような特質は他の出土文字資料や書跡に例がなく、前述のように「折敷2774表」に近似した結体の同一文字を有するのみである。

#### ◎ 翻刻

志こころはをら八平

すて

とのわ。

お、む無こ、ろの

志八平はをら

す□て

このように考えてみると、本文は「志は折らずて、殿は御心の志は折らず」と漢字仮名交じり文に置き換えることができる(注34)。「すて」は「打消の助動詞「ず」の連用形と接続助詞「て」の連語(注35)」で、「万葉集」所収歌にも用例がみられる。

試みとして本文の大意を示せば、「希望は捨てずに、殿は御心の希望は捨てずに」となる。

#### 第四節 「折敷4050」

##### ● 先行研究

「折敷4050」【図9】は、平成一一年度(一九九九)五月から一二月にかけて行われた柳の御所遺跡第五〇次調査によって、井戸状遺構五〇SE三より出

土した。遺構の年代は一二世紀のものとして推定されており(注36)、墨書時期もこれを下回るものではないと考えられる。法量は縦二九・二cm、横六・六cm、厚さ〇・四cm(注37)。

齋藤邦雄氏は墨書を「未解読」としながらも、その構成について「基本的には段を変え三行取りで文字を書いたと推定される。さらに、一行目の左側、二行目の上部に斜めに数行文字が記されている」と指摘する(注38)。

「折敷4050」は岡氏らによって二度、釈文の検討が行われており(注39)、近年の翻刻「みちのをくに泉／みたりしひら清泉／あはれは白□／□ひのう(注40)」も、これと大きく相違することはない。二〇一三年の岡氏らによる検討の中で「五・七・五・七・七の配列が認められるため、和歌であった可能性が高い」と指摘されている点が特筆される。

一方、平田氏は当該折敷の一行目に「みし人」、二行目に「ひと」、三行目に「あはれは」がそれぞれ書かれていると考察する。同氏が「折敷4050」と西行風の書との同時代性を指摘している点も注目されよう(注41)。

##### ○ 調査報告

「折敷4050」は、折敷底板に七行、計三〇字以上を収める。折敷の色味は焦げ茶色。下部の変色が甚だしい。折敷は右下が欠損した状態で現存。上部に三本、中部に三本、下部に五本のシミがある。

書出位置は「みし人□」、書止位置は左上「□とを／の／こし／□」。

墨色は中濃。墨継ぎ後に書かれた文字として、第二行「ひ」字が挙げられる。書出の「み」字が大きく太い線で書かれ、全体的にゆつたりとした用筆が特徴。

書式は本文三行、追而書四行からなる散らし書き。追而書は折敷を右に四五度回転させた状態で垂直に書かれる。行間はおしなべて狭く、これは加工後の折敷に墨書した所以と考えられる。





## 第二節 「折敷2081」にみる書式の再検討

先に考えてきたことをふまえ、本節では、出土文字資料のうち「折敷2081表」の書式に改めて焦点を当ててみたい。

前節で考えた「散らし書きの構成を示す略図」と当該折敷の書式を比較すれば、両者が同様の特徴を示しているのは一目瞭然といえよう。したがって、「折敷2081表」の書式は偶然にできあがったものではなく、「散らし書きの構成を示す略図」にみるような書式を、当該折敷の書き手が理解して書いていたと指摘できる。それでは、このような書式のルーツはどこに求められるだろうか。

この問題については、早く平田光彦氏による指摘があるが<sup>〔註46〕</sup>、その具体例を示せば次のようになる。たとえば、「灌頂阿闍梨宣旨官牒紙背文書」中の「某仮名消息」（一〇八七―一〇八八年成立）<sup>〔図17〕</sup>や、「不空三藏表制集紙背文書」中の「藤原為房妻仮名書状」（一〇八一―一〇八六年成立）<sup>〔図18〕</sup>など、都に伝来する仮名消息の本文や追而書は「折敷2081表」によく似た書式を有している。また、やや時代は下るが、冷泉家に伝わる「新古今和歌集文永本紙背」の中には、作歌の下書きとされる「禅忍和歌草案」（一二六七―一二七五年成立）<sup>〔図19〕</sup>のような書跡があり、当該折敷にみる書式との関係が思われて興味深い<sup>〔註47〕</sup>。

このように、仮名消息や和歌草案の類にみられる散らし書きが一二世紀の平泉へ伝播していた事実は疑いない。さらに、その証拠として位置づけられるのが、前節の考察を通して明らかになった「散らし書きの構成を示す略図」や、本稿で取り上げた「折敷2081表」の書式であるという点を強調しておきたい。

おわりに

本稿において明らかになった点を整理すると、次のようになる。

(1) 出土文字資料の調査を通して、墨書土器一点、折敷三点・五面が有する

本文の釈文を再検討し、新たに稿者の考えを示した。なかでも、「折敷2774裏」について一字を除く全文を翻刻し、その大意を示した点が特筆される。

(2) 複数の出土文字資料に仮名遣いの混同がみられることを指摘した。

(3) 「折敷2774表」が有する筆線跡の一つを「散らし書きの構成を示す略図」と定めた。

(4) 「散らし書きの構成を示す略図」と「折敷2081表」の書式の類似を指摘。さらに、

①両者が示す散らし書きの構成のルーツが一世紀の仮名消息の追而書にある点

②両者が、一二世紀の平泉に①の散らし書きの構成が伝播していた事実を物語る出土文字資料として位置づけられる点

以上二点を指摘した。

一方、「折敷2774表」の複数筆者説に関する検討、「折敷2774裏」における「志」「を」<sup>平</sup>字の問題、「折敷2081表」が有する「あ」字の検討、出土文字資料間における書き手の相違の考察など、残された課題や新たに発現してきた問題も多い。また、古代の都における散らし書きの諸相や発生要因を新たな視座から検討すること、全国より出土する多数の木簡が有する仮名を研究対象として取り上げることなどが、今後の具体的な課題として挙げられよう。

### 主要参考文献

●「柳之御所跡 一 閑遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査」《分冊1 本文・図版》／（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター／一九九五年三月

●「柳之御所遺跡 出土資料目録」岩手県文化財調査報告書第一四一集／岩手

県教育委員会生涯学習文化課／二〇一五年二月

●『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡―第五〇次発掘調査概報―』岩手県文化財調査報告書 第一〇七集／岩手県教育委員会／二〇〇〇年三月

●齋藤邦雄「岩手・柳之御所跡」『木簡研究』第二二号／木簡学会／二〇〇〇年一月

●岡陽一郎ほか「平泉出土文字資料の再検討 その1」『平泉文化研究年報 第二二号』岩手県教育委員会／二〇一二年三月／一七―二四頁

●岡陽一郎ほか「平泉出土文字資料の再検討 その2」『平泉文化研究年報 第二三号』岩手県教育委員会／二〇一三年三月／六七―七二頁

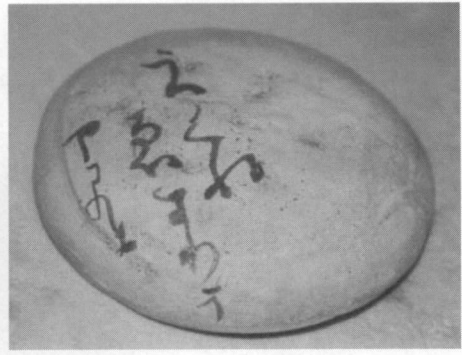
●入間田宣夫「折敷墨書を読む」『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館／一九九二年四月／二八九―三〇五頁

●岡陽一郎「中世人の「くらし」と「こころ」―出土文字資料からみる平泉―」『第三回平泉町』世界遺産講演会《報告書》／二〇〇三年三月／四二―五六頁

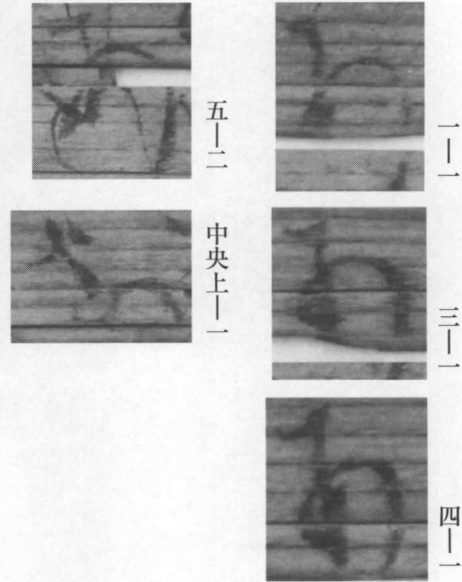
●平田光彦「平泉文字資料の筆跡」『平泉遺跡群出土文字資料検討会中間報告会発表要旨』岩手県教育委員会・平泉町教育委員会／二〇一二年一月／

九―一二頁

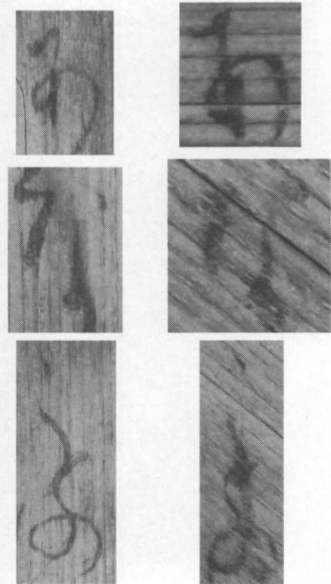
【図1】「手づくね小皿3775」



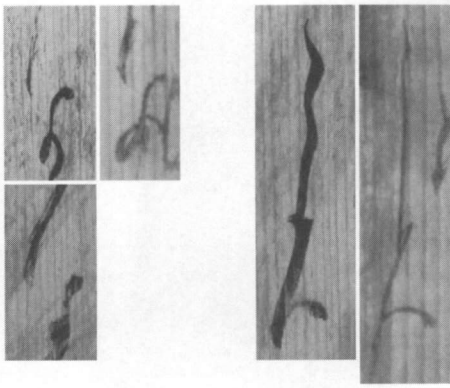
【図4】「折敷2081表」「あ」字(行—文字数)



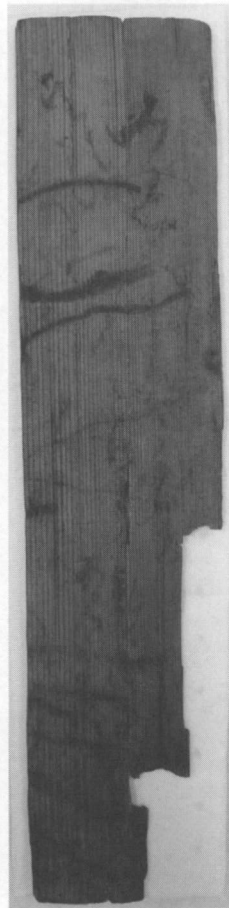
【図5】右「折敷2081表」左「同裏」



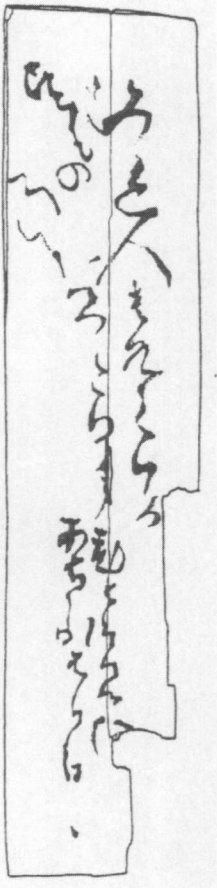
【図8】右「折敷2774表」、左「同裏」



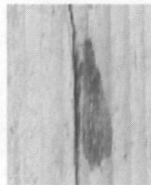
【図9】右「折敷4050」



【図10】左「折敷4050」実測図



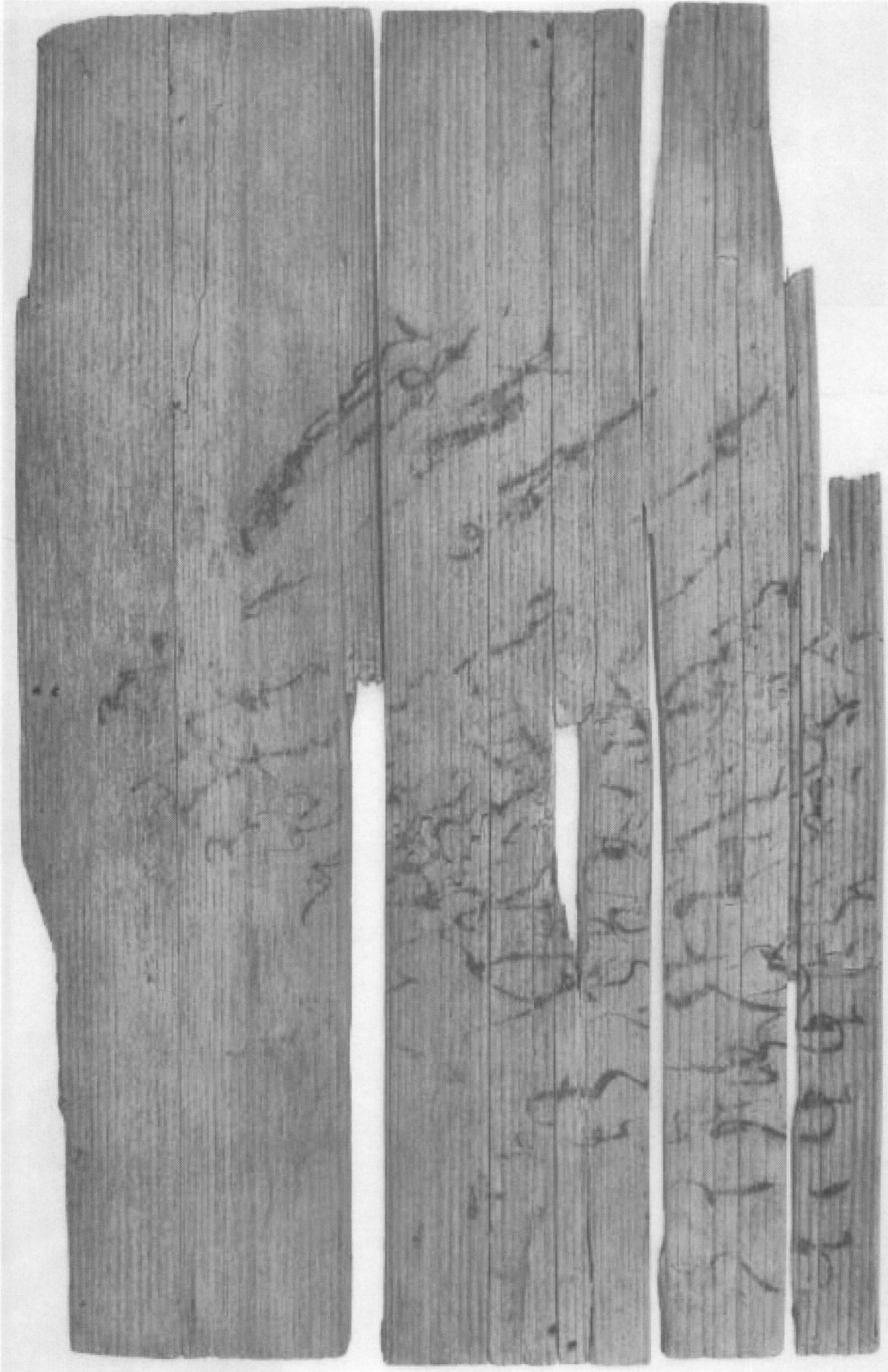
【図11】筆線跡①



【図12】筆線跡②



【圖2】「折敷2081表」





【図3】「折敷2081裏」



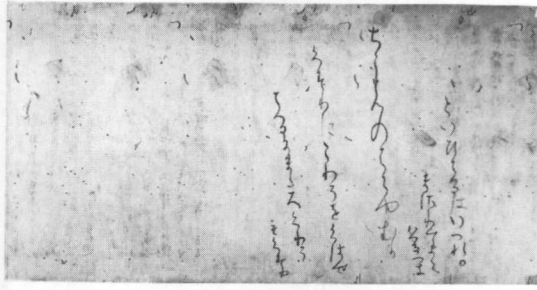
【図6】「折敷2774裏」



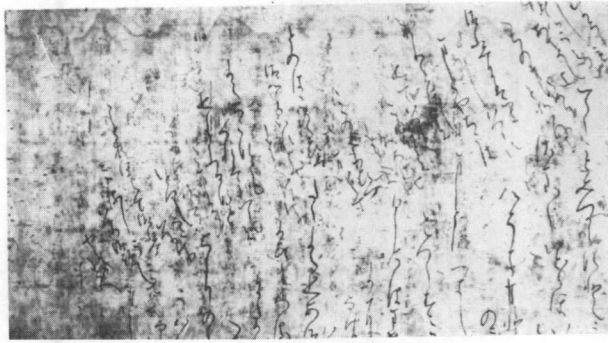
【図7】「折敷2774表」



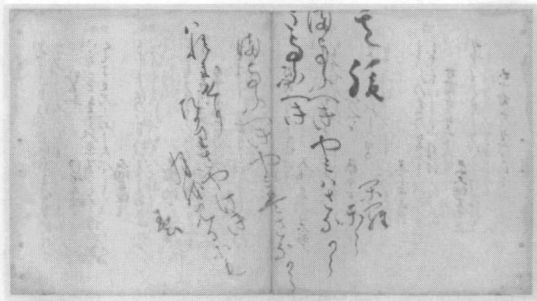




【図17】「某仮名消息」



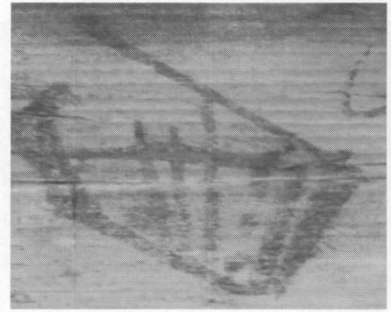
【図18】「藤原為房妻仮名消息」



【図19】「禅忍和歌草案」

ほ↓お	は↓わ		み↓い	混同例
「おんん」	「どのわ」	「すわう」	「くれない」 <sup>※</sup> <sub>以</sub>	語句
「折敷2774表」	「折敷2774表」	「手づくね小皿3775」	「手づくね小皿3775」	出土文字資料名

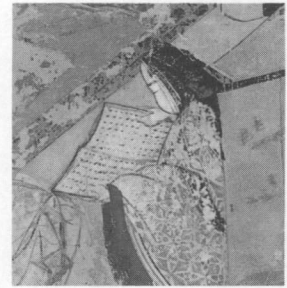
【表1】



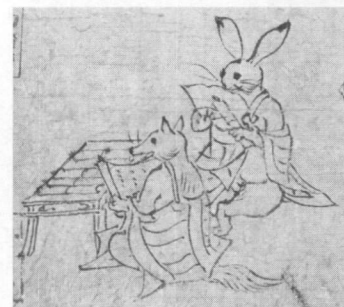
【図13】筆線跡③



【図14】「大般若経巻第一六七」見返絵部分



【図15】第五十帖「東屋二」部分



【図16】甲卷「二〇紙」部分



注

(注1) 「柳之御所・平泉遺跡群」の名称で、平成九年(一九九七)三月五日

に指定(文化庁HP「国指定文化財等データベース 主情報詳細」<http://kunshiteibunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>、二〇一五年)。

(注2) 「岩手県平泉遺跡群(柳之御所遺跡)出土品」の名称で、平成二二年(二〇一〇)六月二十九日に指定(文化庁HP「国指定文化財等データベース 主情報詳細」<http://kunshiteibunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>、二〇一五年)。

(注3) このような中であって、「平安宮跡出土和歌墨書土器」(一〇世紀はじめ)の仮名を「行頭のそろっていない、すさみ書き(稿者注:散らし書き)をしている」と指摘したのは、別府節子氏である(「平安の仮名鎌倉の仮名」(出光美術館、二〇〇五年一月、九九頁)。

(注4) 笠嶋忠幸「日本美術における「書」の造形史」(笠間書院、二〇一三年一月)、富川展行「平安時代における「散らし書き」誕生についての一考察―寸松庵色紙にみられる「上下(左右)分割式」の構成法をめぐって―」(「美術科研究」二八号、大阪教育大学美術教育講座芸術講座、二〇一一年三月、一四七―一六五頁)。

(注5) 衣川彰人「散らし書きについて」(「東洋学論集」創刊号、愛知教育大学、一九九四年三月、一七二―一八八頁)、後藤文明「葦手」と「散らし書き」(「長良アカデミア」第四号、岐阜女子大学大学院文学研究科、二〇〇一年三月、二九―五九頁)、加藤億一「余白とちらし」(「新潟大学教育学部高田分校研究紀要」第一四号、新潟大学教育学部高田分校、一九六九年一月、一二九―一四三頁)。

(注6) 本稿中、出土文字資料名の後ろに附す四ケタの数字は、報告書等における掲載番号に準拠している。

(注7) 「柳之御所跡 一関遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・

36・41次発掘調査」(《分冊1 本文・図版》、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九五年三月、三二四―三二五頁)。

(注8) 前掲注7、五八七頁。

(注9) 岡陽一郎ほか「平泉出土文字資料の再検討 その1」(岩手県教育委員会「平泉文化研究年報 第二二号」二〇一二年三月、一七―二四頁)、同「平泉出土文字資料の再検討 その2」(岩手県教育委員会「平泉文化研究年報 第一三三号」二〇一三年三月、六七―七二頁)。

(注10) 折敷両面の区別は「柳之御所遺跡出土資料目録」(二〇一五年)「資料目録」中の記載に準拠している。ただし、同書において「裏面」と記載のある面を本稿では「裏」、特に記載のない面を「表」と表記している。

(注11) 前掲注7、一六三―一六四頁。

(注12) 前掲注7、六三二頁。

(注13) 「折敷墨書を読む」(奥州藤原氏と柳之御所跡)吉川弘文館、一九九二年四月、二八九―三〇五頁。初出は「平泉柳之御所跡出土の折敷墨書を読む」(「紀要XI(平成二年度)」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九一年三月、三―一頁)。「宇津保物語」に「人、の御前の折敷どもを見給とて、仲忠の侍従、花園の胡蝶にかきて/花ぞの朝夕わかず居る蝶を松の林はねたく見らむ」(「日本古典文学大系」第一〇巻「吹上 上」、岩波書店、一九五九年二月、三二〇頁)、『とはずがたり』に「やう、日数経るほどに、美濃の国、赤坂の宿といふ所に着きぬ。(中略)盃据へたる小折敷に書きて、差しをこせたる。思ひ立つ心は何の色ぞとも富士の煙の末ぞゆかしき」(「新日本古典文学大系」第五〇巻、岩波書店、一九九四年三月、一七〇頁)、『吾妻鏡』に「遠江国菊河宿において、佐々木三郎盛綱、小刀を鮭の楚割つぎに相副へ、子息の小童をもつて御宿に送り進ず(中略)かの折敷に御自筆を染められて曰はく、まちゑたる人のなさけもすはやりのわりなく見ゆる心

ざしかな」(『新版全譯吾妻鏡』第二卷、新人物往来社、二〇一一年一月、一七三頁)などである。また、『伊勢物語』にこれらと同様の記述が見えるとの吉田歆氏による指摘がある(『平泉の出土文字資料の初歩的検討』(『第2回東北文字資料研究会資料』東北文字資料研究会、二〇〇四年一月、一〇八頁)。

(注14) 前掲注13、三〇〇～三〇一頁。

(注15) 「平泉文字資料の筆跡」(『平泉遺跡群出土文字資料検討会中間報告会発表要旨』岩手県教育委員会・平泉町教育委員会、二〇一二年一月、九～一二頁)。

(注16) 岩手県文化財調査報告書 第一四一集 平泉遺跡群発掘調査資料集、岩手県教育委員会生涯学習文化課、二〇一五年二月、三九頁。

(注17) 柳之御所遺跡第二八次調査によって、井戸跡二八SE一六より出土。法量は、縦三〇・一cm、横二二・六cm、厚さ〇・五五cm。年輪年代測定の結果は一一三八年(前掲注7、六三五頁)。報告書等における掲載番号は「2772」となるが、当該折敷は現在「人々給絹日記」と呼称するの一般的である。

(注18) 例えば「あまくも」「こひし」の語句を有する和歌に、『古今和歌六帖』(二〇世紀後半頃成立か)「あま雲のちかくひかりてなるかみの見ればおそろしみねば恋しも」(『新編国歌大観』第二卷、角川書店、一九八四年三月、二〇五頁)、『万代和歌集』(二二四八年成立)「あまぐものころにかかるとこひしさをそらにも人のしらせてしかな」(同前、四三六頁。太字稿者、以下同)などがある。

(注19) 二松學舎大学、福島一浩氏の御教示による。

(注20) 「不空三蔵表集紙背文書」中の「藤原為房妻仮名消息」(二〇八一～一〇八六年成立)、「新古今和歌集 文永本紙背」中の「某書状」(一二六七～一二七五年成立)などに、「まことに」の語が確認される。

これらの仮名消息が有する「こ」字の特徴は極度に簡略化した結体であり、当該折敷の文字がこれと同様の特徴を有していることが、今次の翻刻の論拠となる。

(注21) 前掲注7、二〇七頁。

(注22) 前掲注7、六三五頁。

(注23) 前掲注13、二九七～二九九頁。

(注24) 「柳之御所遺跡出土の墨書資料」(『紀要XVII』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九九年三月、一～三頁)。

(注25) 「中世人の「くらし」と「こころ」―出土文字資料からみる平泉―」(『第三回平泉町』世界遺産講演会「報告書」二〇〇三年三月、四二～五六頁)。

(注26) 前掲注9、二〇一二年論文。

(注27) 「柳之御所遺跡出土資料(重要文化財指定品)目録」(前掲注16、四〇頁)。

(注28) 前掲注15、一〇頁。ただし、「折敷2774表」については「書写人物が一人であるかは分からない」とし、入間田説と同様の見解を示す。

(注29) 後述の「折敷4050」に同様の書式が見られるほか、たとえば「藤原為房妻仮名消息」をはじめとする仮名消息に類例を見ることができ

る。

(注30) 「千五百番歌合」(二二〇二～〇三)「冬一」に「さえくらしよなやすくなるあられかなならのふりはおとをのこして」(『新編国歌大観』第五卷、角川書店、一九八七年四月、四六六頁)、『正治後度百首』(二二〇〇)に「おほ井河みぎはは風にさえにけり井せきに浪のおとをのこして」(同第四卷、一九八六年五月、三三七頁)とある。

(注31) 後述の「折敷4050」に見られる「し」<sup>ホ</sup>字は、標準的な点画で揮毫されている。

(注32) 「更級日記」(一二三〇年以降成立)、『日本名筆選43』二玄社、

二〇〇四年二月)中、「月のあかき夜などは」(四六頁)、「ものふかき  
み山のやうには」(二〇三頁)、「あふさかの関のせき風ふくこゑは」  
(二四〇頁)など。

(注33) 「巻第四」(『日本名筆選30』二玄社、一九九四年一月)中、「をりて  
みば」(一七七頁)、「女郎花うゑたるをみて」(一八二頁)、「ねなましも  
のを」(一八三頁)など。

(注34) 「志」「をる」の語句を有する和歌として、『古今和歌集』(九一三年頃  
成立)「心ざしふかくそめてし折りければさえあへぬ雪の花と見ゆら  
む」(『新編国歌大観』第一巻、角川書店、一九八三年二月、一〇頁)が  
挙げられる。

(注35) 『角川古語大辞典』(第三巻、角川書店、一九八七年九月、四七七頁)。

(注36) 『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡―第五〇次発掘調査概  
報―』(岩手県文化財調査報告書 第一〇七集、岩手県教育委員会、  
二〇〇〇年三月、二四頁)。

(注37) 齋藤邦雄「岩手・柳之御所跡」(木簡学会『木簡研究』第二二号、  
二〇〇〇年一月、一四〇頁)。

(注38) 前掲注37。

(注39) 前掲注9。

(注40) 前掲注27。

(注41) 前掲注15、一一〜一二頁。

(注42) 前掲注36、五一頁。

(注43) たとえば「見し人」「あはれ」の単語を有する和歌に、『新葉和歌集』  
(一三八一年成立)第一九「哀傷歌」「みし人のなかばはかへる泉川おく  
る波もあはれいつまで」(『新編国歌大観』第一巻、七九五頁)がある。

(注44) 出土文字資料に限らず、複数の墨書が異なる方向に書かれる例は少な

くない。たとえば「藤原良相邸跡出土墨書土器」(九世紀成立)には、  
低部外面に書かれた多字数の仮名に対し、土器を右に九〇度回転させた  
状態で書かれる小字数の仮名がある。

(注45) 当該折敷の筆線跡については、先行研究において特別それという指摘  
は為されていない。ただし、これまでに柳之御所遺跡から出土した墨画  
資料として、代表的なものに「墨画(寝殿造風建物)折敷2080」「木  
簡(折敷辺に墨画、墨書が記される。墨画は擬人化されたカエルが右手  
に扇とススキを持つ)960」(前掲注27、三九、四五頁)などがある。

(注46) 本稿三頁上段五〜八行目の引用文を参照。

(注47) 財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家歌書紙背文書上』(朝日新聞社、  
二〇〇六年六月、五〇・一〇七頁)。

#### 謝辞

この度の出土文字資料の調査にあたり、岩手県教育委員会事務局生涯学習文  
化課の櫻井友梓様に御懇切なご指導を賜りました。心より厚く御礼申し上げま  
す。